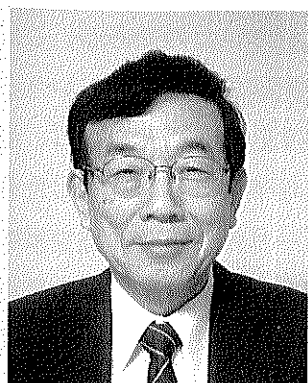


名古屋市立大学経済学部創立

五十年史

2014



名古屋市立大学経済学部への 思い出と期待

愛知大学大学院会計研究科教授・筑波大学社会工学系名誉教授

星野靖雄

名古屋市立大学経済学部は昭和39年に創立されており、平成26年で創立50周年であるという。この年は、当方のような昭和20年生まれの者にとっては覚えやすい年である。というのは、はっきり記憶しているのであるが、愛知県立旭丘高校の3年生時の担任教員であった上島三夫先生が、「来年の4月に名古屋市立大学経済学部が創設されるので、受験希望者は留意されたし」と言われたからである。そして、旭丘高校から名古屋市立大学経済学部の第1回生になり、大阪大学大学院を経て、北海道大学経済学部の教授になった内田和男君がいた。

当方が、名古屋市立大学に勤務するようになったのは、西田耕三先生のおかげである。名古屋工業大学工学研究科修士課程経営工学専攻に入学した時に、指導教授であった青木脩教授の紹介で、当時、単著2冊を白桃書房から出版された新進気鋭の経営学者で名古屋市立大学助教授であった西田耕三先生の自宅へ押しかけ指導を仰いだことにある。神戸大学の高名な教授であった占部都美教授の一番弟子であった西田先生が、旭丘高校の7年先輩であったことにもよる。博士課程は東京大学大学院経済学研究科経営学専攻へ進学後、東洋大学経営学部に勤務していたとき、西田先生からのお誘いで名古屋市立大学へ10年間勤務することになった。

名古屋市立大学では、社会人大学院創設に関する増加2教授ポストの候補者をヘッドハンティングして、初の外国人教授であるマルコム・トレバー(Malcolm Trevor)先生をロンドンの政策研究所(Policy Studies Institute)から採用できた。後に、当時の根津永二学部長より、「外部の高名な学者である小池和男先生よりこの人事を高く褒められた」と聞き気をよくしたものである。学部生の教育面では、経済学部第24・25期生のトレバーゼミと当方のゼミ生と一緒に夏休み中の合同ゼミ合宿で諏訪湖方面へ車で出かけたことを思い出す。¹⁾

しかし、トレバー先生は、筆者が帰国時にはすでに名市大を辞めておられた。配偶者が日本人でも、日本語が十分でなく特に漢字の使用が難しいアングロサクソン系の人物が、日本の大学に長くいるのは大変であったと思う。

社会人大学院用教授枠での2人目の人事は、大阪外国語大学教授であった梅津和郎先生を大阪外大の出身者にもかかわらずお誘いに成功し招聘できたことである。学部長の松永嘉夫先生と名古屋駅のホテルのロビーまで迎えにいったが、松永先生は梅津先生の顔を知っているというので安心してしたが、15分以上も遅れておられるので、念のためと前に座っていた年配の

紳士に話しかけたら本人であったので驚いた。約束時間より前に来られていたのである。これらの先生方の経済学部・経済学研究科への所属により国際化教育・研究は促進されたといえる。

さらに、ラトガス大学経営大学院のCheng-few Lee(李正福)教授を短期招聘したり、当方が豪日交流基金によりニューサウスウェールズ大学商学部へ行き1年半講義・研究をしたり、再度、交流協定により短期の客員教授として同大へ出かけたり、ミズーリ州立大学コロンビア校経営・行政大学院へフルブライト客員教授として1年間 講義・研究・行政の実務を体験させていただいた。コロンビア校での教員人事では、候補者はセミナーでの論文発表のみならず大学のあるコロンビアの町の案内から学科長の自宅でのパーティーにまで招待され、当方は、教員会議で人事の投票までさせていただいた。日米の人事の違いがよくわかった。

さらに、名古屋市では前述のトレバー教授が着任後、半年後に彼が当時会長であった欧亜経営研究会(Euro-Asia Management Studies Association)の国際学会を名古屋市立大学の協賛で名古屋市公館を利用して開催できたことである。中日新聞(1989) その成果は、Trevor(1991)の本を出版されたことである。トヨタ自動車、ヤマザキマザック、大幸財団の資金、人材面での協力、学部のゼミ生の協力等もあり、短期間で大きな成果が上がったと言える。一つ気になったのが、名古屋市公館でOHPの利用がうまくいかなかったことである。

名古屋市立大学経済学部の全国国公立大学経済学部偏差値ランキング2014では、旧制帝国大学、神戸大学、横浜国立大学に次ぐ第10位となっている。ただし、組織、入試形態の上で東京大学、首都大学東京、横浜市立大学、筑波大学は除外されている。

名古屋市立大学経済学部の優れている点は、教員の新任・昇格人事を、業績の計量化による客観的基準で判断していることにある。出身者を中心とするような情実人事をしていないことにもある。教育面では経済学部ゼミの専用室があるなど、内外の大学では聞いたこともないような充実ぶりであった。国立大学理系組織における技官に相当する調査助手の存在も英語の論文のタイプ、コンピュータ利用等の相談等大変有用であった。²⁾

2012年には経済学部棟の耐震工事を終了されたとのことで、小型エレベータを設置されたのは長年の希望であったので一安心している。

今後は、外国人教授人事を専門分野で実施したり、海外の協定校との単位の互換、ダブル・ディグリーのプログラムの設置等の国際化を促進し、一層の研究・教育の推進により大学の世界ランキングの向上を目指していただきたく期待するものである。³⁾

注

1)名古屋市立大学経済学部同窓会(1991)は、ゼミ名を加えた名簿である。

2)調査助手の名簿は、名古屋市立大学(1992)にある。

3)台湾の高等教育評鑑中心基金會(Higher Education Evaluation & Accreditation Council of Taiwan)が2008年に発表したHEEACT世界大学ランキングの紹介では、名古屋市立大学は世界では484位、国内では32位とある。HEEACT世界大学ランキングは文

献データベース“Essential Science Indicators(ESI)”のデータをベースに「研究生産性」「研究成果」「研究優位性」を評価指標としてランク付けされた大学ランキングとしている。HEEACT(2014)

参考文献

中日新聞(2014) 中日新聞・東京新聞記事データベース、名古屋で欧亜経営研究会、12月7日。

HEEACT 世界大学ランキング(2014) 大学ランキング.Net

<http://daigaku-ranking.net/world/heeact-%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%B0%EF%BC%882008%E5%B9%B4%EF%BC%89/>

星野靖雄(1993) 社会人大学院の試み—名古屋市立大学の場合— 経済学教育 12 pp.53-58。

星野靖雄(2000) 社会人大学院10周年の回想—最初の外国人教授、

名古屋市立大学大学院経済学研究科日本経済・経営専攻修士課程10年のあゆみ、

社会人大学院創設10周年記念事業実行委員会(記念誌編集委員会)編、名古屋市立大学大学院経済学研究科所収。

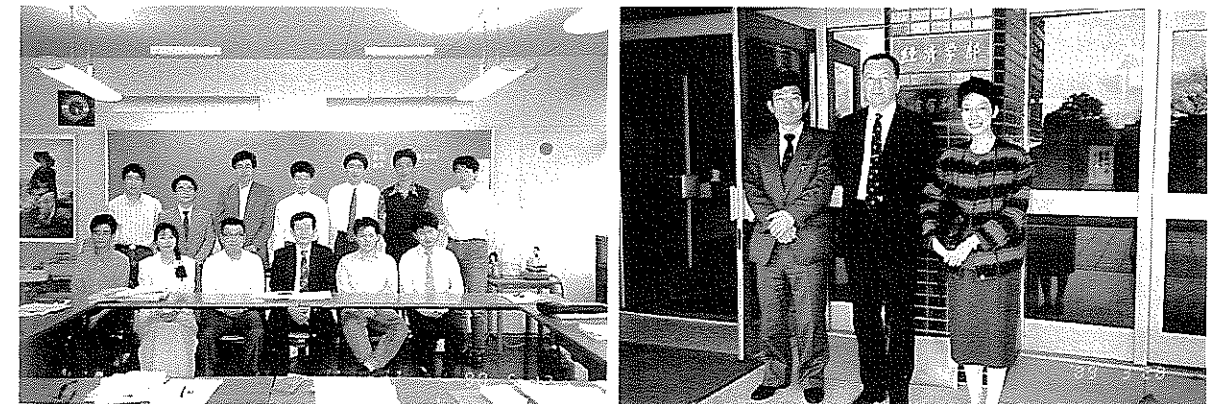
名古屋市立大学経済学部同窓会(1991) 瑞山会会員名簿 第4号。

名古屋市立大学(1992)平成4年度 教員・学生名簿。

Trevor, Malcolm (1991) International Business and the Management of Change, Avebury.

全国 経済学部 偏差値ランキング (2014)

<http://daigakujuuken2.boy.jp/zenkokukeizaigakuburanking.html>



編集後記

経済学部創立50周年を記念して「50周年誌」を作成することは学部長(研究科長)に就任することが決まり、前任者の井上泰夫教授から引き継ぎを受けた一昨年(2012年)の2月頃から念頭にあった。当初は、時系列的に経済学部や大学院経済学研究科の出来事を簡単に記述し、写真を添えるパンフレットのものを考えていたが、副研究科長(副学部長)の大野幸一教授や焼田党教授(現学部長)それに瑞山会(経済学部同窓会)の幹部の皆さんと検討しているうちに、50周年という大切な節目なので、もっと充実した年誌を作るべきだということになった。そこで、学部長経験者をはじめ元教員の方々、卒業生の皆さん、それに現職教員からも寄稿を募って、経済学部の回顧と展望を語っていただく書とすることとし、大野教授、焼田教授や私と同じく本学部出身者である吉田和生教授をはじめとして経済学研究科の各分野の代表者で構成される将来計画委員会に諮り、承認を得、同委員会をそのまま編集委員会として編集作業を開始した。

学部長経験者をはじめ元教員の先生方に寄稿の依頼を開始したのは昨年夏頃(2013年)からで、当初は本誌を「経済学部創立五十年史(仮称)」として原稿の依頼を行った。元教員の先生方や卒業生の皆さん、現職教員に自由に書いていただいた原稿を集めて「五十年史」と呼べる内容となるか危惧があったので仮称としていたが、いただいた原稿を見ると「五十年史」という表現を用いている方が少なからずあり仮称は外さざるを得なかった。

当初は不安を抱きながらの「五十年史」の編集であったが、寄せられた原稿の内容は、経済学部や経済学研究科の出来事を当事者として生き活きと描いたものや、過去あるいは現在の経済学部の特徴や課題、今後の展望をそれぞれの立場から説得力のある筆致で書いたものばかりであり、本誌の内容はいわば紀伝体の「五十年史」と呼ぶにふさわしいものになったと思う。本誌に寄稿していただいた皆様に深く感謝申し上げたい。

すべての元在籍教員の先生方、すべての年や出身ゼミナールの卒業生の皆さん、それに元教員・卒業生以外の学外の方々に寄稿いただくことができなかったのは、残念であり、編集者として責任を感じるところであるが、109名に上る皆様から原稿をお寄せいただき、質・量ともに充実した「五十年史」が刊行できることは喜ばしい限りである。

最後に、本誌の編集に多大な貢献をいただいた経済学部教育研究支援室助手の倉地弘美さん、梶田定子さん、田春子さん、資料提供等に協力いただいた山の畑事務室事務第一係の皆さん、同事務室囑託の井上恵美子さんに感謝の意を表しておきたい。

なお、本誌の題字は、焼田党現経済学部長の筆によるものである。

名古屋市立大学経済学部創立50周年記念事業実施委員会を代表して **森 徹**

名古屋市立大学経済学部創立

五十年史

2014年(平成26年)11月1日発行

発行者 名古屋市立大学経済学部
〒467-8501
名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1

企画・編集 株式会社タナベフォト企画
〒451-0061
名古屋市西区浄心2-13-5

印刷・製本 ダイコロ株式会社
〒540-6591
大阪府中央区大手前1丁目7-31 OMMビル11階